

正宗白鳥

モウパッサン(1)

モウパッサン(一)

(1)

R. H. Sherard のモウパッサン評伝を読んで、その平明暢達の記述を快く翫賞するとともに、さまざまな挿画に心を楽ませていたが、ふと一少女の生けるが如き姿絵とその筆蹟の模写を見て、私は心ときめく思いをした。「こういう女性であつたのか」と、回顧の思いに私は耽つた。そのメリー・パシカットセツフという名前は五十余年の昔、年少の私の心に深く印銘されたのであつ

た。民友社の雑誌「國民之友」の雜録欄に、徳富蘆花が、パシカットセツフ女史の「日記」を抄訳して、數回に渡つて連載していたのを、私は幾度も讀返して感慨を催していたのであつた。半世紀を隔てた今日、あの時の感慨が朦朧として心に浮んで来るのである。

容貌も才能も万人にすぐれていると自信して、絶えず恋や名声を夢見ていた彼女は、肺患に罹つて死期の近づくのを自覚しなければならなくなつて、天地に哭泣するようになった。死にたくない、生きていたい、この楽しい世を楽しみたいと、思う熱情を、日記に書留めてい

た。「なぜ神様は人間を苦しめなさるか。神様がこの世界をお造りになつたのなら、なぜ邪悪や苦痛や暴虐というようなものを造られたのか」と、神に向つて恨みの言葉を書きちらしていた。病気が彼女の肉体を荒さなかつた前には、彼女は天上の児女のうちの最も可愛い者の一人であつて、その魂は浮世に汚されないで、最後まで天与の美しさを保つていたと、シエラードは称讚しているが、書中の写真で見ると、天女のような神聖美もなければ、才気のきらめきもなさそうで、むしろ凡庸の少女相をしている。

彼女は、偉人に対し、偉大な仕事をした男子に対しては、無限の情熱を寄せていたそうだ。そういう人々を絶えず憧憬していた。或時にゾラを崇拜していた。その作品を熱烈に愛好していたためなので、彼女はその事をゾラに書き送った。しかし、ゾラは返事をしなかつたであろう。彼は未知の男子に文通するような女性に興味を持たない作家であつて、かつて、「自分は女の手紙を重要視したことはないので、一生に四度以上返書を出した覚えはない」と云つたことがあつた。ところでモウパッサンは或朝、流行作家として諸方から寄せられる無数の手

紙のうちに、一種風変りのものを見つけて、それに興味を寄せたのだ。その頃の彼は、男を追廻している六十人もの、女性に手紙を付けられていたが、匿名で寄越したパシカットセツフ嬢の手紙にはちよつと心を惹かれた。「私はあなたに知られないでいましょう。私は遠目にでもあなたを見ようとも思いません。あなたのお顔が私の目に快く映るかどうか分りませんものね。あなたがお若くつて、結婚はまだしていらつしやらないことを知っているだけで沢山ですの。でも、私がチャーミングな女だったことはお知らせしときますわ。そうすると私に御返事下

さるお気持ちになれるでしょう」と云ったような文句が、モウパッサンに魅力を感じさせたのだそうだ。しかし、彼ほどの作家がそのくらいな文句に心惹かれるのは不思議である。彼は珍らしく返事を出したので、彼女は子供のようになりて喜んだらしい。そして衷情を吐露した手紙を折返して出したのだが、モウパッサンは、この未知の少女の手紙にますます興味を寄せて、彼自身の生涯と文学職業の痛苦を述べて相手の同情を得ようとしたのであるが、私にはそれも案外である。彼に似合わしからぬように感じた。早くから厭人厭世の気持の濃厚

であつた筈の彼が少女の甘たれた文句に魅せられて、心魂の憂苦を訴えるなんか、私には意外である。

二度目の返書には、「男子でも、女子でもさまさまな世上の事件でも、人生のすべての事に私は殆んど無関心である。これは私の信条であるが、他人の事より自分を一層重要視しているのでもない事を附加えて置く。万事万物、詰りは退屈であり、道化ていて、みじめである。私は一日の三分の二は、心の底から退屈な、くさくさする気持で過し、残りの三分の一は文章を書いて過すのだ。書いた物は、出来るだけ高く売りつける。そして、この

いやな職業を励まねばならぬ必要を悲しみながら筆を採っている」という意味の、自己心境が述べられている。

音楽のたしなみのあるこのロシア産の少女と、美貌の青年作家とは次第に親しくなったので、二人に共通の点は、神を信ぜざる事、僧侶を侮蔑する事、人類を嫌悪する事であったと云う。彼女は、「人間の肉体の恐るべき臭気」について話した事がある。また彼女の記録のうち、に、モウパッサンでも書きそうな事が書かれている。「人類よりも馬鹿で臆病で、意地の悪い生物は何処にもいないであろう」と書いているのだ。また彼女は彼と同様な

死を恐れていたが、それは彼同様に、不治の病を身に宿していることを知っているためであろう。「ああ、人の生涯は一度きりであると思う時、そして、一瞬毎に死に近づきつつあると思う時、私は気が狂いそうである」と、彼女は日記にしるしている。彼にしても彼女にしても、人間を嫌いながら、死を恐れ、生に強い執着を覚えていたのである。

「私は今誰れをも敬愛していない。けれど、誰れか敬愛すべき人の現われよと待設けている。早くその人を得たいと思っっている。愛のない生涯は酒の無い徳利見たいな

ものだ。無論酒は良くなければならぬ」と、云っている。メリーは、ギーを愛せんとし、結婚もしたかも知れなかった。二人は手紙のやり取りだけでなく、直接会って話すようになったのだが、彼女は肉体的にも彼を讚美するようになったし、彼も彼女の容色を讚美したらしい。しかし、メリーは、無論正式の結婚でなしに情交を実現する事は考えもしなかつたし、その頃のギーは、結婚生活については強い反感を抱いていた。彼は多くの作品に於て、結婚生活を嫌悪し冷嘲している。彼は皮肉な口調を用いずして結婚について語ったことはなかつた。「妻よ

りも、善良堅実な友人を見つけた方がいい」と、或作品のなかに書かれている。「国法の庇護の下に両性が和合することは、ブルジョアの暗愚の頂点である」と彼は思っていた。有名な短篇「彼」に於て、モウパッサンは、率直に、「自由の恋愛だけを地上の楽しい好事」として書いたことを公言している。

彼女が幸福を求めんために接近した、パリの男子では、モウパッサンが最後の人であったが、彼は完全に無道徳で、人間の自然の本能を發揮することに何の束縛をも加えなかった。放縦なる生活振りから、性的現象を著るし

く侮蔑するようになり、自分に興味の無くなった女性を突出すことに何の躊躇もしなくなつた。従僕フランソアの日記に十二月十五日、主人は客間の戸を開けた。鬱陶しい様子だ。主人は前夜或貴族の夜会へ出掛けて、その帰りに一人の外国の貴夫人を連れて来た。金髪さわやかで、さして美しくはなかつたが、若くって魅力があつた。朝食のあと、彼女は飛出したが、直ぐまた帰つて来た。翌日も朝の九時頃やつて来た。そういうことが四日間続いた。その後で主人は、私に、（あの女をお前は好きなのように扱えよ。おれはあの女に何の用もないのだ。あの

女は、来るたびにウイーンへ行くと云っているが、そちらへ行かないで此処へ戻って来る。蹴飛ばしちやどうだ」と乱暴な口を利いたと記している。この日附はメリーの死んだ一年前に当たっている。

メリー・パシカットセツフ及びギー・ド・モウパッサンの二大芸術家の短期間の交わりは、底知らずの淵と淵との接近のようではないか。彼等は真夜中に大海を渡る二艘の舟が別々に沈没するような哀れな悪運に捉えられた人々ではないかと、シエラードは、二人の交際について叙述した最後を詠嘆的言語で結んでいる。しかし、そ

れほどに深く考うべきことであろうか。

(二)

丸山熊雄氏の「新訳「モーパッサン選集」を二冊読んだ。この二冊には、色っぽい短篇ばかりが選ばれているようであったが、訳文は甚だ碎けている。大抵の翻訳文に有り勝ちのギコチない所がない。私は面白可笑しく読んで、それを機縁に、持合せの英訳のモウパッサン全集数巻を通読した。そして久振りにこのフランスの天才の小説の

うまさに心打たれたのである。ノルマンディの田舎者を描いたもの、巴里の月給取りを描いたもの、社交界の女性、街の女などさまざまな女性を描いたもの、彼の作品は千変万化している。面白く読ませる技術を心得ていること彼の如きは稀なのであろう。真実の叙述、有りのままの描写は尊むべき事であるが、モウパッサンは、真実世界から取った材料を、自己の空想の境地に面白く幻出させているようだ。我々は、フランスの実社会を全く知らないから、断言は出来ないようなものの、彼の作品の大部分が、有りのままの現実描写であろうとは思われな

い。しかし、それにかかわらず、男女の心理行動を、ああだの、こうだのと、よく穴ぐり穿鑿して書きつくしたものだと思う。

彼は、無慈悲で情け用捨もなく書いていくように感ぜられる。「猫について」と題された感想的小品には、動物に対する彼の態度がよく現わされているが、彼は猫を愛玩するとともに、これをいじめて喜びもしたのである。「私は猫が私を噛み私の肉を裂こうと思っていると気付や否や、私は猫の首っ玉を掴まえて、素早く、力一杯投げつける」と云っている。幼い頃庭園で猫がワナにか

かって苦しんでいるのを興味を寄せてじっと見ていたと云っている。アフリカ旅行中の或日、テントの中で寝ていると、頬ぺたに冷たいものが落ちて来たので目を醒まされた。見ると、奇怪な面をしたヒキ蛙なのだ。それで、彼は復讐を志した。煙草を薄い紙で巻いて、蛙の口へ押し込んで火をつけると蛙は苦しんで息をはずませるのだが、それは滑稽である。蛙は煙草の煙にむせびながら死ぬるのだが、その腹は風船のように膨れるのである。

人間を取扱う態度にも、人間の観察振りにも、彼にはそういうところがある。「盲人」というノルマンディ種

の小説に、或盲人を身内の者が厄介がって死ねがしに取扱うところが明晰に描写されているが、作者はこの盲人に憐れみを寄せているのではない。むしろ小気味よい思いをして見ているようなものだ。

"Lost" という簡にして要を得た小品がある。「恋は死よりも強し。だから、また、恋は最大な苦痛よりも強し」という实例が提供されているのだ。この小品の語るところによると、或株式仲買人が若い男爵夫人を猛烈に恋慕していた。或日博覧会を見物に出掛けて、夫人に接近する機会を得たのだが、その時、ロシアの毛皮商の売店で黒

貂の毛皮を見つけた夫人は、それが欲しくて欲しくてたまらなかつた。でも、四千ルーブルという値段票を見ると諦める外無くなつたのだが、そこを付狙つた株屋は、「あなたのような美しい方を前に置いて、そのくらいの金は何でも無いじゃありませんか」と、お追従を云つた。そして、自分が買って進呈したいから許してくれと云つた。男爵夫人はそれが戯談でないことを確め、「あなたを恋している」との相手の言葉を聞いて、「あなたは不埒の方だ。私は或小説のなかのヴィナスが奴隷を鞭で打つたようにあなたを打てるものなら」と云つた。そうすると、

株屋は「あなたの奴隷にならなりたいものだ。実際黒貂の毛皮を着て鞭を持ったあなたは、その小説のヒロインの絵姿によく似合っているだろう」と云う。それで、男爵夫人はふと思いついたように契約した。私があなたを鞭で打つことを御承知なら、私も素直にあなたのお言葉を聞くことにすると云うと、相手は大喜びで承諾した。毛皮と鞭とを夫人は身につけて、翌晩ひそかに株屋の来着を迎えた。先ず株屋の両手を縛って自分の前に跪づかせてから鞭を揮った。斟酌なく、思う存分鞭打った。哀れなる男は苦しさに呻きだした。はげしい拷問だ。しか

し、一つ一つの殴打によって自分は幸福に近づきつつあるということに慰められていた。二十四度打ったあと、夫人は鞭を下に投げた。「さあ、もう一つで」というところで、事が停滞したのだ。「私は二十五度打ったあとで、あなたのお望みをかなえる約束しました。あなたはたった二十四度打っただけです。それには証人がありませんよ」と、そう云って夫人は、扉の向うの幕を開けた。彼女の夫と二人の紳士が微笑しながら入って来た。その瞬間、恋いした株式仲買人は、「しまった」と、悲しげに呟いて、深い溜息を吐いた。

面白い「作り話」である。しかし嗤い事ではないとも云える。夏目漱石は、モウパッサンの「頸飾り」を批評して、道徳心の破壊を責めた。人間の努力を無視し冷笑する態度を非難したのだ。この恋せる株屋の話も、人間の苦勞を蔑視し、嗤いものにしたので、作者の態度は無慈悲だと云っていい。この株屋ばかりではなくって、大抵の人間は、希望を抱いて今日の苦痛に堪えているのであるが、二十四度の打撃で停滞して、希望はついに達せられずに終るのである。さまざまな彼の短篇のうち、ロスト見たように落語染みた作品も少くないのだが、

我々はそれ等を人生味の深いものとして見るのは、作家の背景に由るのである。厭世憎人の感じを蓄えていて、ついに狂死するに至ったモウパッサンという天才の作品だと思えばこそ、落語的猥談的作品は、深刻な意味がありそうに思えるのである。由来芸術の鑑賞は多くそうなのだ。

結婚を冷笑していた彼は、一方では、夜中に一人で寝ていることの恐ろしさに結婚する男のことも同感をもつて書いている。「孤独」という感想録的小品は、森鷗外の「妄想」の如く、その作家の人生観の結晶であって、

そこには、人間と人間とは心と心が完全に融和する望みのないことが観測されている。いかに愛し合っている筈の男女でも、心と心には隔たりがあり、要するに人間は孤独であるという悲痛な感慨が洩らされている。トルストイはこの感想に同感し、共鳴もしたらしく、これについてトルストイらしい批判を下しているが、我々と雖もこの孤独感をつき詰めて行くと、凄惨な感じに沈むのである。モウパッサンの孤独感も徐々に進んで行ったので、それなればこそ、心に客観的態度を執って、人生を傍観し得られて、さまざまな作品が製作されたのである。年

齡とても孤独感が深まって、のっぴきならぬ所になると、
広い人生観察なんか出来なくなつて、自己独白見たいな
主観的作品に粘着するようになったのである。はじめの
うちには、「或男の話」というような、よそよそしい物
語の形を取つて、彼自身の感想を伝えていた。「私は危
険を恐れてはいない。人が侵入して来たら私はびくびく
しないでそいつを殺したのであろう。私は幽霊を恐れな
い。私は超自然の者を信じない。私は死人を恐れない。
私は人間のすべてが、死しても絶対に無に帰することを
信じている。しかし私は自分自身を恐れている。私は訳

の分らぬ恐怖心の動きを恐れている。壁を恐れ、家具を恐れ、日常親しんでいる眼前のものを恐れている。自分の理性が自分から離れ出ることを恐れている」と云った。部
り、「自分で口を利くと、自分の声に恐れを感じる。部屋の中を歩くと、戸の外に、カーテンのうしろに、箆笥のなかに、寢床の下に、何か分らん物が潜んでいるように感じる」と云ったり、「秋のじめじめした或晩、召使いは食事のあと私と離れて自分の部屋へ行った。私はどうして時を過さんかと迷いだした。暫くの間部屋を歩き廻ったが、心は何かを押付けられて疲れを覚えて、読む

力も書く力もなくなつた。雨は窓に注いでいる。私は心が沈み果して、声を立てて泣出すか、誰かと話してこの思いを追払わねばならなくなつた」と云つたりしている。

しかし、こんなに何かに憑かれているようなことを書いていても、早い頃の彼は、心の秘密は世間に見破られていたかつた。その頃は、健康幸福成功の外形を世に示していた。彼は名と富を得ていた。その作品はあらゆる階級の読者に読まれ、女性との噂はパリ社交人に羨まれているし、がっしりした体軀は生氣澆刺の作品産出にふさわしく見られていた。そして、作品におりおり現われ

る憂鬱恐怖狂気の影は、作品の色取りとして見られ、天才のひらめきのように看取されていた。作家自身の心魂が蝕みつつあるとは知られなかった。しかし、彼は次第に健康を失いつつあったのだ。「ベラミ」を書終った時には、過労のためか、眼が悪くなりだした。トルストイはモウパッサンの長篇では最初の「女の一生」を激称して、その後の作品には次第に道徳性が無くなったのを遺憾とし、それは流行作家になったための精神的墮落のように云っているが、流行作家になったためよりも、病気が次第に昂じたためではないだろうか。

(三)

日記風の感想録 「水の上」に於て、彼は最もよく自分について語った。退屈幻滅疲労苦悩の感じをはじめてぶちまけた。「私は独りでいることの気持よさを感じだした。何物にも乱されない安らかな休息の快さを感じだした。私は誰れにも訪ずれられず、誰にも招かれず、ただ一人でいる時の真の自由を感じている」と云っている。独居の恐ろしさに堪えずして、人に会わんとした気持とは

反対であるが、どちらにも真実なのに違いない。流行作家として諸方の社交界へ引出されるのは、モウパッサンのような気風の人間でなくっても煩いことであろうが、日本のように、文壇の有名人も華美な社交場裡に招かれることなんか殆んど皆無な国では、「はやりっ児になるのは煩いなあ」と、空嘯くのは、板につかぬ振舞いである。

地中海にヨットを浮べて遊んでいた時には、自然の愛らしさとくらべて、人生の空虚を彼は深く感じたのである。「一思いに死んだ方がいいと思うほどに生存の恐怖を感ずる日もあり、景色や人間や思想の果てしなき単調

に悩むこともある。しかし、動物のようになって生を樂しむ日もあるのだ。仕事に疲れて、この世では得られなような希望を、疲れた心に浮べたりしている時、万事万物の空虚を侮蔑する時、私の動物然たる肉体は生存の恍惚境に没入することもあるのだ。私は鳥のように空を愛し、うろついている狼のように森を愛し、羚羊の如く山を愛し、茂った草の中にころがり、馬のように駆けまわり、魚のように水中に泳ぎたくなる。私は地上を汝等人類が愛する如くでなく、彼等動物の如く愛するのである」と云っている。彼は、動物的本能を鮮かに持ってい

たらしい。

後年、病の重くなつた時、彼は述懐している。「日光が今私の窓に注いで甚だ温かだ。私はなぜこの和やかな境地の幸福に自分の身を浸していられないのか。今吠え立っている二三匹の犬が私の心境をよく現わしている。あの鳴き声は哀れな歎声なのだが、あれは誰れに向つて訴えるのでもなく、何処へ行くのでもなく、ただ苦しい叫びを夜の空に漲らせるので、私も出来ればそうしたいのだ。私があのだものように吠え立てることが出来たなら、私はたびたび野原へ出るか森の奥へ行つて、暗中

に彼等とともに何時間も吠え立てたであろう。そうした
ら私の心も安まりそうだ」と云っている。岩野泡鳴が半
獣主義を唱えたが、モウパッサンは、繊細なる文化人で
あるとともに、多分に野獣性をそなえていたのである。

“Melancholy Bull”と云われた所謂^{ゆえん}である。彼はフロオ
ベルを「最も不幸なる人」と云っている。ゾラは、モウ
パッサンを葬る詞のうちに、「最も不幸であり、最も幸
福であった人」と云っている。二つとも文人特有の誇張
語であり感傷語であって、冷静なる批判語ではないのだ
が、しかし、モウパッサンの作品や伝記を通読すると、

目ざましい華やかさに心の惹かれるとともに心の痛ましい思いがされる。ゾラの追悼の辞は当を得ているか。ギー・ド・モウパッサンが正気を失う数週前に、「私は流星の如く文学に入った。雷鳴の如く、そこから去るだろう」と、自己批判をしている。そして、或日医師に向つて、「隠さずに云つて下さい。私は発狂するでしょうか。若しそうであつたら、私は直ぐにも自殺します。狂人になるよりは死んだ方がどれほどましですか」と訊ねた。医師はどう答えたか分らないが、彼は間もなく、死を撰ぶべき時来れりと覚悟したらしい。それで、忠僕フラン

ソアが寢床を整えて、快よく主人を寝かして去った後の、静かな瞬間を利用して、ピストル自殺を試みた。ところが、フランソアがあらかじめ、銃器から弾丸を抜いていたので目的は達せられなかった。喉を切ろうとしたが、紙切ナイフだったので、軽微な傷をしただけであった。高山樗牛は、青年らしく、平凡な生存を嫌って、「死か狂か」などと感傷的詞句を弄んでいたが、狂気なんかいいものじゃない。モウパッサンの処置は正しかったのである。死にそこなった彼は、暫くの間生き延びて近親者の憐れみを買ひ、ついに、油の尽きたランプのように消

え去った。

狂気していた間には、誇大妄想語を連発して、金塊だの、莫大な資産だの、埋没していた売物の発掘だのを夢見ていたそうだ。そういう事は素早く聞取って記録することをお忘れなかつたゴンクールは、その日記に、モウパッサンがつねに金の事で荒れ狂っていると記している。株屋に指図したり、隠れた財産を狩り立てたり、彼の口にする財産を附添人が盗むのを気にしたりしていると記している。いかに天才であっても、気が狂って生きるのは厭うべき事である。しかし、彼は発狂中金の事ばかり

云っていたのではない。その病院の医師某の記録によると、この狂人は或時、自分の思想が頭から逃出したと空想して、その行衛を捜そうとした。そして、人を見ると、

「君は僕の思想が何処へ行ったか、知らないか」と訊ねていた。ところが、彼は不意にそれ等の思想を見つけたと空想しだした。幸福に輝いていると思った。それ等の思想が自分のまわりにあつて、胡蝶の姿をしていると云うのだ。悲哀は黒い思想、喜悅は石竹色の思想、光榮は金色の蝶。ふと彼は叫び出した。「オー、何と美しい赤味がかつた色だ。ひどい淫乱の相だ」彼は目で蝶のあと

を追って、それ等が近づくと、手で捉えようとする真似をした。

天才らしい、モウパッサンらしい空想ではないか。彼は「ル・オルラ」だの、「彼」だの「誰か知る」などに於て、精神異常後の自己の心境の直写をして、読者を驚かしているが、完全に発狂したあとの、それ等の幻想は書き得なかつた。しかし、狂人の心理を叙するのが、常人の心理を叙するよりも、特に尊い訳はない。怪奇な記事は珍らしいものとして我々の興味を呼ぶが、人生宇宙の真実が特別に深刻にそこに現われているのではあるま

い。人生宇宙の真実は、常人の日常生活に現出しているのである。我々の座辺に動き潜んでいるのである。人生の真実は、「メーゾン・テリエ」や「盲人」に於てよりも、「ル・オルラ」や、「誰か知る」に於て、一層深く搜られているのではない。

ポール・ブルジェは、「ペトロニアスの作品を除外してはシーザー時代のローマを理解し得られざる如く、モウパッサンさまさまの作品無くしては一八五〇年から九〇年まで（十九世紀後半）のフランスを充分に理解することは不可能であると云っているが、果して左様であ

ろうか。傑れた作家の作品に時代の影が鮮かに映っているのは当然であろうが、それも程度である。彼の作品によつてフランスを判断されてはたまらないと云う者があるかも知れない。モウパッサンの作品は、あの頃のフランスの社会を素材として彼の頭に醸しだした幻影である。当人も左様思っていたのであろう。

(四)

自然主義勃興前後の日本の文壇では、モウパッサンの

小説はよく読まれたものである。私は学生時代に柳田國男氏が、「これは田山の本だが読んで見ろ」と云って英訳の「ベラミー」を貸してくれたので、暑中休暇に読むことは読んだが、左程面白いとは思わなかった。田山花袋は日光の古本屋で、「Odd number」と題する英訳のモウパッサン短篇集を購入して読んで、はじめてこのフランスの流行作家の作品に接し、國木田とか柳田とか云うような友人にも勧めて読ませたそうだが、この文集は、英国向きの健全な作品ばかり集められているのだ。それでモウパッサンは、こんな作家かと独断していたのである。

ったが、そのうち、赤い表紙の粗悪な英訳本の全集が来たので、我も我もと面白がって読むようになり、短かくって、解り易くって、話の筋が面白くって、翻訳稼ぎの材料には、誂え向きなので、いろいろな文人の筆であちらこちらの雑誌にこのフランス小説の重訳が掲げられるようになった。私も二三篇は翻訳した。國木田獨歩も早くから糸くずとという一篇を翻訳しているが、私は今度新たに刊行された獨歩全集第一巻によつてはじめて読んで、獨歩の翻訳も案外うまいと感じた。それとともに、近代日本の傑れた短篇作家である彼も、フランスの世界

的短篇作家には遠く及ばないと感じた。獨歩全集のなかで、「糸くず」が特に光っているから不思議だ。

モウパッサン論も断片的に現われだした。早速日本の西鶴に比較された。田山花袋などはモウパッサンについて大いに学ばんとしたようであった。青い表装の新らしい英訳全集が丸善に来たのは、明治四十年頃、自然主義全盛時代であって、私などはこの全集によって、この作家に親むようになったのである。しかし、歐洲近代の文学に関する我々の理解は甚だ浅はかであつたらしく、私なども、トルストイの「モウパッサン論」くらいを金科

玉条として、それを標準にこの作家の作品を鑑賞していた程度であった。トルストイほどの人も驚嘆していたであらうほどに、この作家の小説技巧は群作家を抜いているのであらうし、話しっ振りの面白さは無類と云っているのであると断定していた。彼が彼として書くべきものを十数年の間に書きつくして、サツサとこの世を去ったのは、小気味のいい生涯であったと云ってよかろうと、かねて思っていた。

日本文学電子図書館

モウパッサン（一）

著 者：正宗白鳥

制作者：宮澤一郎

底 本：「白鳥全集」第7巻、新潮社

昭和42年5月30日 発行

昭和51年8月30日 セット版

日本文学電子図書館